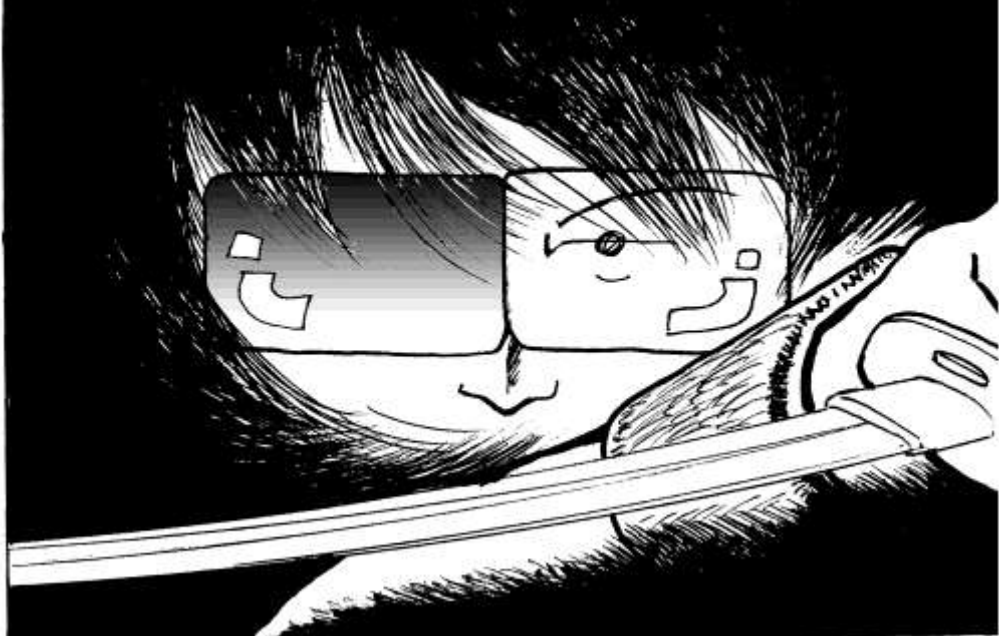


# 桃源境 ものがたり

石川鏡介

Art:J=P=金堂



## 第一部

## 巻第一

## 第一章

(一)  
明は闇の中をひたすら歩いていった。

狭い洞窟の中である。

もうどのくらい進んだだろうか。見当もつかない。相当な距離のようでもあり、ほんの少しだけのようにも思える。

なぜこの洞窟に入ったのかさえ忘れてしまいそうになる。

(死んでもいい。この世から消えたい)

そう思って、知る人の少ない、「秘境」の地と呼ぶにふさわしい場所の洞窟に入ったのではなかったか。

なのに、どうして進むのだろう。

明の心の中にさまざまな考えが駆け巡り、消える。

たしかに、洞窟の中へ入って闇に包まれてから、睡眠薬を大量に飲んで自殺を図ったのだ。しかし、また目をさまし、死ぬなかつたことを知り、途方にくれた。

薬が無ければどうするのか。舌をかむことや、この洞窟内にいつまでも留まって餓死するまで待つ、ということとは考えられ

ない。そんな気にはなれなかった。

そして周囲を見回し、自分が光の無い世界にいることを痛切に感じ、いたたまれなくなつてまた歩き出したのだ。

入り口に戻ろうとしたものの、反対方向だったらしい。いつまでたつても戻れない。

どこまでも続く闇に、はてしない心ぼそさを覚え、しゃがみこみたくなる。だが、しゃがみこめばもつと怖くなるような気がする。叫びたいような。

いや、叫んでどうなるものか。誰もいない闇の中だ。誰にも聞こえない。叫びが自分の耳に響くだけだろう。そう打ち消し、また一歩一歩足を前に出す。歩かねば自分の存在が消えてしまいそうな想いが頭をかすめる。

(おれは何を考えているんだ。バカバカしい)

生きていても意味が無い。そう思い、この世を否定して、この世から去りたくて、洞窟などに入った自分が「消えること」を恐れてどうするのだろう。こんなばからしいことがあるか。

明は自分自身をあざわらうように笑つた。

結局はなんだかんだと言つても生きたいのだ。目の前の世界に、自分をとりまく環境にたいして絶望的になり、「死にたい」などと考えたが、本当は世界が変わればいい、と心の奥底では思っていたのだ。現実の世界が変わるのでなければ、自分が違う世界へ行ければ、と。

「そうだ。違う世界へ」

明は声に出した。

声は洞内を反響し、もうひとりの自分の声のように聞こえた。進む。その先には、むかし読んだ物語のように、別世界が待っているかもしれない。それは桃源境なのか、それとも、勇者が妖怪・怪獣の類いと果てしなく戦う異世界なのか。

明にとつてはどちらでもよかった。

懐中電灯の光を頼りに入った洞窟は、コウモリがいるわけもなく、光の無い所でのみ生息する虫が這い回っているわけでもなく、ましてや地底人やらの物の怪が住み着いているわけでもなく、何もなかった。

天井しれずの高さでもなく、ほふく前進しなければ進めないような狭さでもない。人ひとりが通れるだけならじゆうぶんな高さで、とくべつ危険な凹凸があるわけでもなく、分かれ道も無くひたすらまっすぐ伸びる道となっていた。

明が「そうだ。違う世界へ」と声を発してからどれだけ経つたろうか。

はるか前方に、白い小さな点がみえた。

なんだろうか、あれは。

明は進んだ。歩を緩めるわけでもなく、急ぐわけでもなく。

白い点は徐々に大きくなった。

光の点だ。

「出口か！」

ようやく気づいた。白いものは洞窟の外の光りだったのだ。

久しぶりにみる光りだった。

外に出られる。そう思ったとたん、明は足を滑すべらせ、しりもちをついた。

「あつ！」

明は声をあげた。

手をつけて起き上がろうとしたが、またすべった。

「すべるよ、ここ。ヌルヌルする！」

冷や汗かきながら、むりやり起き上がると、今度は前のめりに倒れた。

そこから急に、はげしい下り坂になったらしい。

「うわっ！」

激しい勢いで転がりだした。

もう、なにがなんだか、わからなくなった。

どれだけころがったろうか。長い時間だったかもしれない。

それほど長くなかったかもしれない。

いつのまにか、彼は自分が空中に放り出され、水の中に落ちていくのを感じた。

明は夢の中をさまよっていた。

草木も生えていない、まるで砂漠のような場所である。

光はある。かすかにある。たそがれどきのような暗さではあるが。

そんな世界をひたすら歩いていた。

前方からは風が吹き付けてきていた。

やがて、前方から風に乗って鈴の音が聞こえてきた。

「なんだ？」

目をこらし、よくみる。何か黒い点が見えた。

点は大きくなった。そのうち、人の姿にかわった。

明は立ち止まった。

前方の人影が徐々に大きくなった。まっすぐ、明のいるほうへ向かってくる。

最初に「黒い影」と見えたのは頭に被った菅笠だった。

身体には何か経文のようなものが書かれた法衣をまとうている。もとは白衣だったのだろうか。文字が書かれていない部分はほこりにまみれたためか、薄汚れている。時代劇などでよくみる巡礼の姿に似ていた。

謎の人物は左手には数珠を持っており、右手で杖をついている。菅笠を深く被っているので顔はよくわからない。

明はなにか声をかけようとした。

だが、できなかった。相手に、うかつに声を掛けてはいけないような威圧感のようなものを感じたのだ。

相手は明の目の前で立ち止まった。

「そなた」

巡礼のような姿の者が声を発した。

「えっ」

明もつられて声を発した。相手の声はまさしく女のものだった。

た。

「そなた、この世のものではないな」

「は？」

なに言っているんだ、この人は、と明は思った。

「この世の者でなければ、死ぬこともあるまい」

「？」

「この世の者でなければ、『この世』に光をもたらすこともできよう」

まるで独り言のように言いつつ、明の横をすりぬけ、後方へ去って行く。

「ちよつ、ちよつと」

明は慌てて振り向いた。

しかし、すりぬけた人影はいつのまにか小さくなっていた。

「待って」

明の呼びかけにも答えない。

そして周囲は闇に包まれた。

闇の中から何やら複数の人間の話し声が聞こえた。

明は目を開いた。

ぼうつと黄色い光がみえたが、焦点が定まらない。

やがて、目が慣れた。周囲がはっきりと見えるようになった。

低い天井。その下に黒い人影が複数。

奥に囲炉裏のようなものが見えた。時代劇でみたようなやつ

だ。

時代劇で、といえば、黒い人影はみな、粗末な、いかにも着古したような着物を身にまとっている。

「おおっ」

複数の影から声があがった。

「目をあげられたぞ」

「やはり、なにか違う。この方は、まさしく」

感嘆の声のようだ。

明は首をこころもち上げ、改めて周囲を見回した。

山姥のような、白髪の、皺だらけの老婆がいる。

頭髪がすべて白い者もいれば、黒髪が半分で白髪が半分程度の者もいる。

そうかと思えば、頬のこけた、初老程度の年齢に見える男もいる。

ほとんど老人である。彼らは頭髪を無造作に束ねていた。

(なんだ、また夢の中の世界か)

明は思った。

囲炉裏。粗末な着物。すすで汚れたようにみえる肌。頭髪。

着物。すべて時代がかっている。現代のものとは思えなかった。

そもそも、自分が入った洞窟の近くに村があったとしても、いまだき、囲炉裏などを使うだろうか？

汚れた着物を着るだろうか？

視界に入る物の中に、現代的なものは何ひとつなかった。

彼らの着物はいかにも使い古されたもののように、時代劇でよくみる、貧しい階層の人が着るものよりもさらに粗末なものに感じた。

(夢の中か。それとも、タイムスリップ？)

明は考えた。

まさか、江戸時代か室町時代、それ以前の何時代かに時間を越えて移動してしまったのではないか。小説や漫画ではよくある話だ。

(いや、そんなことは)

ありえない、と思った。そういうものは所詮、空想の世界の話で、現実にあるわけが無い。

「ここは何処だ？」

声を出してみた。

すると……。

「おおっ」

また感嘆しているような声があがった。

「しゃべったぞ」

「なんと、神々しいお声」

目を見開いて言う者がいた。

「へ？」

明もつられて目を見開いた。

(神々しい声って、どんな声だよ。まさか、俺の声が)

彼は思った。いい声だなどと他人に言われたことが無いので

ある。「へんな声」と言われることは何度となくあったが。

「やはり、あなたさまは」

明を囲んでいる者たちの中では比較的若い、中年くらいの男が言った。

(なんだ？ こっちの質問には答えなくて)

明は思ったが、相手は明の心のうちなど知る由も無く、

「あなたさまは、神のお使いで」

「はあ？」

「あなたさまの、神々しいお姿、お声。着ておられたものに

それに」

男は枕もとを指差した。

明もそのほうを見た。

「なんとも不可思議なるものをお持ちで」

そこにはメガネがあった。いつもかけているメガネだった。

「我々には無いものばかり。これこそ、あなたさまが神のお使いである証し」

ははあ、なるほどな。そういうことか。服装も髪型も違うし、腕時計も身につけているし、メガネもあるし。この人たちが見たことも無いものを持っているから、ということか。それに、洞窟の中で持っていた懐中電灯はどうしたかわからないが、ズボンのポケットの中にはペンライトがある。こういうのを「不可思議なもの」といっているんだなあ。いや、なるほど、なるほど。よくできた夢じゃないか、夢とはいえ、こんなこと言わ

れると現実らしい。リアルな感じだ。だが、やはり夢だろう、明はそう考えた。

そこで、

「うむ。そうである」

どうせ夢なんだ。だったら、あとは野となれ山となれ、だ。

調子に乗ってやるう、と思った。

「そうである。おれは神の子。闘いの神の子」

どこかで聞いたようなセリフだな、と思いつつ、胸を張って言った。

「オオーツ！」

また感嘆の声が上がった。明以外の、その場にいる全員が声をそろえたようだ。

こりゃあ、やつぱり夢だ、と、明はさらに調子に乗る。

「神から言われたのだ。この世に光をもたらす救世主となれ、と」

さきに見た夢を思い出しながら言った。

感嘆の声を発した者たちは、まるで貴族か將軍様の前で平伏する家来衆のように手をつかえ、低く頭を下げた。

「ハハーツ」

「ありがたや」

「ああ、ありがたや」

「ありがたや」

うーん、なんとも変な、なんとも面白い夢だ、と明は思った。



(一)

そこは巨樹に囲まれた小さな集落だった。人々が住む家は粗末過ぎるほどのもので、中には半分ほどが

五つも越えると三方を山に囲まれた盆地に出る。それより先には広大な平野が広がる。隠れ里の者はもともと、盆地を治めていた領主だったが、大平野のはるか東を治めていた大豪族の侵攻を受け、滅亡した。生き残った女・子どもや年老いた男が領

山の斜面の中に埋まっているようなものもある。言い方を変えれば、横穴式住居と物置小屋がくっついたようなもので、住む人々の貧しさ、その特殊な事情を暗に示していた。「ここは隠れ里なのでございます」老人のひとりが言った。

「二十年ほど前、我らはこの山々のむこうの里を治める領主の一族でありました。しかし、いくさに敗れ、城から落ち延び、追っ手をのがれ、断崖絶壁を乗り越え、里の者が足を踏み入れぬこの場所までひっそりと暮らすこととしたのでございます」また別の老人が、さきの老人の言葉を受け継ぐように語り出した。

「……」

明はただ黙って話を聞いていた。ここから東へ、険しい山を四つも

主の一族を守りながら山を幾つも越え、身分を隠して山の民として暮らすようになったという。

なるほど。周囲は高い山に囲まれ、人どころか「鳥も獣も」

通わぬような雰囲気がある。平家の落人の話などは聴いた事があるが、まさにその「落人の里」にふさわしい場所だった。

家が集中しているのは巨樹の多い、斜面のゆるやかな場所だが、少し離れると断崖絶壁ばかりの幽邃境ゆうすいきまである。これでは隠れ里の者たちを追いやった敵とやらも、踏み込めないはずだった。

「で、どこへ連れて行くつもりだ」

明は問いかけた。

洞窟に入った時と同じ長袖シャツに長ズボンという服装で、明は集落から離れ、道なき道を案内され、沢沿いを上流へと進んでいた。

（やはり夢なんだ）

そう思った。斜面をのぼっても疲れを感じないからである。

「御方あかたさま様のもとへご案内いたしまする」

「？」

どうやらその人がこの隠れ里で一番偉い人物のようだった。

時間はよくわからないが、昼間らしい。日が差していないけれども、それなりに明るい。周囲を高い山に囲まれている地形なので、日の出は遅く、日の入りは早いはずだ。平地よりも日が短く夜になるのが早いならば、視界がきく時間帯は日中だと

いうことになる。

やがて、急斜面をのぼり、また斜面が緩やかな、少し開けたような場所に出た。

「こちらでございませう」

そこに一つだけ大きな屋敷があった。

なんか、忍者の頭領が住んでいそうな雰囲気の家だなあ、と明は思った。

かやぶきの家である。

案内されて入った。入口は全体の大きさに比べて小さい。

入ってすぐには土間がある。

「ほう」

明は思わず感嘆の声をあげた。

まるで山深い地方の古民家を改修した郷土資料館かなにかに入ったような感じだ。

柱は太い。奥には板敷きの間が幾つもあった。

一番奥の間に、その「御方様」がいた。

黒々とした大黒柱によりかかるようにして、老女が座っていた。

白髪と皺が目立つものの、肌の色はやけに艶々していて血色

が良い。

目はまるく、なにか光を宿しているように見えた。

着ているものは、かつての城主の奥方らしく、他のものが着ているものとは材質も色柄も違っているように見えた。



「神の子さま。このお方が御方様に」

老人の一人が明に、御方様のそばへ行くよう促した。明はずつと、「神の子さま」という奇妙な呼ばれ方をしている。

明がすつと近づくと同時に、御方様のおつきの者らしき老女が御方様に何事か囁いた。

御方様は明を凝視している。

明は一礼した。

「あなたさまが、神のお使いと」

「そうです。神から、この世に光をもたらすよう言われて参上した」

思わず、そんな言葉が口をついて出た。

明は内心、

（何言っているんだ、おれは。尊大な態度で。なにさまのつもりだろうか）

と、自分で自分をおかしく思ったが、表情にはあらわさない。

「うむ」

明の目の前にいる御方様ばかりでなく、その場にいる者すべてが頷いた。

「やはり、ただものではない」

口をそろえて言う。

御方様が身を乗り出し、両手を出した。そして明の手をとつた。

明は息をのんだ。

「二十年。二十年待ちました。あの城へ帰れるときを。ずつと耐え忍んでまいりましたぞ。帰れる機会が訪れるものと。あなたさまこそ、神のお使い。我らをたすけてください」

「……」

明はただ黙って頷くしかなかった。

「たすけてください」

「たすけてください！」

「あの城へ。あの 城へ帰りたい」

「たすけてください」

明の手を握る御方様の手に力がこもった。

「かえりたい」

「たすけてください」

懇願の声はいつまでも続きそうだった。

「たすけてください」

いつの間にか、この奥の間やその隣りの間に大勢の人が集まっていた。

「たすけてください！」

大合唱になっていた。

「たすけて」

懇願する人々は合掌し、明を伏し拝んでいる。

「……」

明が黙っていると、合掌して頭を下げている人々が顔を上げた。

明は人々の目をみた。何かにとりつかれたような、恨みのこもった、執念にみちた目つきだった。それは御方様も例外ではない。

明の身体に戦慄がはしった。

「わかりました！」

明は叫んだ。

もう、どうせ夢なんだから、なんでもありだ。いままでは夢だからと冗談半分だったが、救世主にでもなつてやれ。どうせ夢なんだから。

「願いをかなえて進ぜよう。あなたがたの願いを！」

再び叫んだ。

「オオッ！」

歓喜の叫びがあがった。

「やはり、神は我らを見捨てなかつたぞ」

「お家再興の願いが叶うぞ！」

随喜の涙を流している者までいた。

明はポケットに入れていたペンライトを取り出した。

「ほら、このように」

ペンライトの明かりをつけてみた。

「この世の光とならん」

わざとつけたいぶつた言い方をすると、

「おおっ！」

「なんじゃ、これは？」

「この光は！」

人々は上体をのけぞらせて驚きの声をあげた。

なかには半歩ほど後ろへさがる者もいた。

明は袖口にペンライトを隠し、そこから外へ光が漏れるようにした。

「おおっ」

「なんと！」

人々はますます驚き、身体を震わした。

どうやら、明の手そのものが光を発しているように思ったらしい。

ペンライトを袖口に隠す前に光をみた者も、その正体が分らないために、明の指から光が発せられたように感じたようだ。

明は改めて室内を見渡した。

御方様の座所となつている奥の間には御方様を含めて六人の老人がおり、隣りの間にも六人ほどいる。

その先に視線を向け、表の方をみた。ふすまや屏風などはない。仕切りなど無く、よほど暗くなければ、はっきりみえる。

土間には十人ほどの者がおり、よくみると若い男女が一名ずつ居た。

（ははあ。お年寄りばかりなのかと思つていたら、若者もいるのか）

明はその若者二人に興味をもった。

少し時間が経ち、外が薄暗くなった。夕方にちかい時刻なのだろう。

明の前に食事の膳が出された。

明は目をみはった。

大きな木の椀いっぱいにとろとろした液状のものが入れられている。

「……」

色は茶褐色。食材が何で、どう調理したのか、なんだかよくわからない。

口をつけようという気になれなかった。

「このような山の中ゆえ、穀類もなく、魚もとれず、あるものといえはこれくらいのもの。神のお使いという方に気に入っていただけか分りませぬが、ささ、どうぞ」

隠れ里の人々は、これを召し上がれ、とすすめた。

何の混じりけも無い、澄んだ目ですすめるのだ。

（ふうん。これが精一杯のもてなしなのだな）

よくテレビなどでやっているアレだ。芸能人やレポーターがジャングルの奥地に入って現地人のもてなしを受ける。そこで出された料理には昆虫なんかがあつて、食文化の違いを思い知らされながら食べる、というやつだ。それと同じようなものだな、と明は思った。

それならば、口に入れるしかあるまい、と明は観念した。里の人々が彼の一举手一投足を見守っている。

「では、いただくぞ」

いただきます、と丁寧な言い方をせず、もったいつけた言い方をして明は軽く頭を下げ、汁椀を口までもつていった。

ひと口ぶんだけすすった。

「ぶっ！」

思わず吹き出しそうになった。

なんだ、これは！

明は改めて汁椀の中をみた。

これはおかしい！

明は心の中で叫んだ。

まずいのではない。味が無いのだ。全くと言っていいほど。

明は首をひねった。

（色がついているんだから、味があるはずだ。それでも味が無いのは調味料が無いから？）

（ここが山また山の隠れ里だから、塩がない。だから味が無いのか？）

明は一瞬のうちに考えた。

味が無いとはどういうことだ。これでは食べる気がしない。

「やはり、お口に合いませんか？」

里の人々が見つめている。

ああ、これはいけない。隠れ里の人々は地を這い岩を舐めるようにしてこの地にたどりつき、どん底の貧苦に耐えて暮らしているのだ。食べるものも限られている。限られた食材で、少

ない調理器具で時間もかけずこれといった調味料も無くこの汁物を作ったのだとすれば、ゼイタクは言えない。

明はそう思った。

とはいえ、味をまったく感じないというのは謎である。

(やはり、夢の中なのだからか?)

夢の中ならば味覚もないのだろう。

(ならば……)

明は或る事を思いついた。

スタツと立ち上がり、口を開いた。

「この汁のおかげにて、力がみなぎってきた」

そう言うなり、土間の方へ進んだ。

里の人々はただ黙っている。

これから何事が起こるのかと固唾を呑んで見守っている、という風情だ。

そして明は土間から表に出た。

表に出てそのまま十四、五歩ほど歩いたところに、岩があった。ちょうど、小学校の運動会などで使う「大玉ころがし」の大玉くらいの大きさだ。

「力試しをしよう」

そう言うなり、深呼吸をした。

そしておもむろに右腕を振り上げた。

(夢なら、痛みを感じないはずだ)

そう考えた明は、

「うおっ！」

腹の底から声を出すなり、空手の瓦割りのように手刀を岩に当てた。

やはり、痛みは感じなかった。

今度は頭突き。

それでも痛みは感じない。

また右腕を振り上げ、手刀を当てた。

すると……、

ピシッ、と微かな音が起こった。

みると、岩にひびが入ったではないか。

「そりゃ！」

調子に乗ってもう一度手刀を当てた。

グズッ！

ゴゴッ！

鈍い音が起こり、岩が二つに割れた。

「おおおおおおっ！」

喝采が起こったのは言うまでも無い。

(三)

夜も更け、明は寝所に案内された。

御方様の住まいの大屋敷とは別棟の、「離れ」のような小屋だが、しっかりした造りの建物である。

「こちらへ」

そこには話には聞いたことがある「せんべいぶとん」のような布団があった。

そして、木で作られた枕がある。

それだけである。

「なんだ、こんなところで、ひとり寝るのか」

明は呟いた。深い意味はない。

ちよつと寂しさを感じただけである。

（どうせ夢なんだから、どうでもいいや。けれど、なかなか醒めない夢だなあ。「神の子だの、神の使いだのと、ちやほやされるのはいいが」

布団の中に入りながら、そう思った。

他の里との交流も無い、ひっそりと息を潜めるように暮らしている「隠れ里」ならば、着るものも寝具も不自由するだろう。

せんべいぶとんみたいなもの、といっても、あるだけマシなかもしれないな、と、そんなことを考えた。

それからどれくらい時間が経つたらうか、

「失礼いたします」

闇の中から、若い女の声が聞こえた。

若い女といえば、食事の前、ペンライトをつけたときに土間に若い男とともに居るのをみただけである。

その時に声を聞いたわけではないが、どうやら土間に居た女らしい。

「……」

明が黙っていると、人の気配が近づいてきた。明が身を横たえている布団の端まできたようだ。

「神のお使いさま」

やはり若い女だった。

なぜ今頃こんなところに来たのだろう、と思いつつ、明は心臓の鼓動の高まりをどうすることもできない。

「な……」

なにか用か、と言おうとして、声にならなかった。

しゅるつと、帯をほどくような音が聞こえた。

次に、ぱさつ、と何かが床に落ちる音。

「お、お、おい」

「御方様のお言いつけにより、まかりこしました」

「えっ」

女はしやがみこむと、次の瞬間、明の布団の中に入り込んだ。

「ちよつ、ちよつと」

明は背を向けた。

女は構わず背に肌を当てる。

「あつ、ちよつと、夢の中でこんな展開になったら、きつと

……」

「？」

「い、いや、その、なんでもない」

呼吸をみだし、小刻みに震える明の慌てぶりなどお構いなしに、女はしがみついていた。



「まっつてくれ、べつにこんなことは」  
「でも、神の御子様が一番寝は寂しいとおっしゃるゆえ、夜  
伽せよと」

あ、そういうことか、と明は思った。

「い、いや、そういう意味で言ったわけでは」

「神の御子さま、私がお嫌いなので？」

「とにかく、添い寝はいいから」

「しかし、神の御子さま、お寒いのでしよう。震えて」

「そうではなくて……。おれは、

ド、ド、ド……」

「？」

「いや、なんでもない。とにかく、添い寝はいいから」

「神の御子ゆえ、卑しき女はいらぬと？」

「ちがう！」

明は女に背を向けていた身体を反転させ、向き合った。

震えがおさまった。

そのとき、明はある事に気づいた。

（このひとは！）

体温が感じられないのだ。

なぜかというのを確かめたくて、思わず、女の肩を抱き寄せた。

「神の御子さま」

女の吐息がかかる。だが、やは

りというか、体温は感じない。温かさも、冷たさも感じないのだ。

夢の中だから。明は改めてそう思った。この現実感のなさは、夢の中だからに違いない。

「あたたかい」

女が呟いた。

闇の中であるため、女の表情は分からない。ましてや顔色の変化など分かるはずもない。しかし、女が明の身体に触れて「温かい」と言ったのは、女には明の肌の感触がわかり、体温が伝わるということだろう。

明は女の背をなでた。

細いが筋肉質の引き締まった体だった。

結局、明は朝まで女と肌を合わせていた。

ときおり、女の背や肩をなでた。ただ、それだけである。

かわりに、口が動いた。

女の名、この隠れ里や周辺の歴史、地理、隠れ里に住んでいる人数などを問い、詳しく聞いた。

その若い女は名を「ゆみ」といった。

年齢は十八。

御方様以下、落人の面々が険しい山を幾つも越え、この隠れ里に落ち着いたのが二十年前。御方様やその親類、家来たちは、総勢三十八名で敵の包囲を脱し、城を落ち延びたが、隠れ里に

落ち着くまでに敵に討たれた者が十九名、険しい山を幾つも越えて緩やかな斜面に小屋を建て、棲み家として落ち着き冬を越すまでに飢えや病で命を落とした者が六名で、それこそ想像を絶する苦勞を重ねたのだという。

若い男ほど「御方様」や老人、女たちをかばって命をおとした。隠れ里に落ち着いて暮らしにも慣れてからは、中年、初老の男は女（適齢期をすぎていた）たちと子作りにはげんだ。

子どもが生まれ、ものごころつくと、学問・武芸を教えた。それは「お家の誇り」を守るためでもなく、隠れ里で生きるためでもなく、城を攻め落とした敵へ復讐し、「お家」を再興するためにほかならなかった。

彼らが隠れ里に落ち着いてから二年後、ふとしたきっかけで、「御方様」らがいた本城とは別の支城から落ち延びた者たち二十名が合流した。総勢三十五名となった彼らのうち、五名が断崖から谷底に落ちて死に、八名が熊や狼などのケモノと闘って死に、四名が病気で死んだ。

その一年後、これまたふとしたきっかけで別の支城から落ち延びて山岳地帯を越えたところに住み着いていた三十二名が山々を越えて合流した。

総勢五十名は男女比が三対七で、彼らは三つの小集落をつくり、「御方様」の住まいを中心にして八つの方角に見張りの小屋を設けた。見張り小屋には三名を常駐させ、敵が侵入しないか等、異変に備えた。

みなが隠れ里に落ち着いてから生まれた者は、ゆみを含め二十名。年齢は、上は十九歳で下が十二歳。彼らは男女を問わず武芸や忍びの術をしこまれ、今では険しい山々を越え、敵の本拠やその敵とも対立している勢力の本拠にも潜入して、間者・細作（スパイ活動や破壊活動など）をしている。

ゆみは「さぶろう」という十七歳の男とともに、たまたま西の国の動きを知らせて隠れ里に帰ってきたところだという。御方様の一族は「鬼田氏」といい、「勝池城」という城を本拠としていた。二つの支城は「古井城」と「甘垣城」という名で、鬼田氏を滅亡させた当の敵は鬼田氏の同族の「夜田氏」という。夜田氏は勝池城の東、十二里先にある川戸城を本拠としている。当主の名は夜田将正。

（うむむ）

なんとも奇妙な夢ではないか。細かい数字が出てきたり、聞いたこともない人の名前や城の名前が登場する。と思しながら、「で、その夜田とやらを倒せばいいのだな？」

明はゆみに訪ねた。

暗闇の中で、ゆみは首を振った。

「いいえ、夜田は強大な力をもっておりますが、敵は夜田だけではありません。夜田将正の弟・努田文信は将正とはげしく争い、夜田家当主の座のみならず、鬼田家が治めていた地も制圧しようともくろんでいるとのこと」

「ふむ」

なんか、とほうもない話になってきたな、と思いつつ、明は目を閉じた。

翌朝、明は喜兵衛という老人に案内されて、もう一つの小集落へ行った。

そこでも大歓迎を受けた。やはり明の着ている長袖シャツ、履いているズボン、靴、かいているメガネ、手首に巻いている腕時計などが彼らにとっては現実離れしたもので、それが明を神の子である証にしているらしい。

明は神の子と呼ばれることにくすぐったさを感じていたが、人々があまりに自分を崇めるのにプレッシャーを感じるようになっていった。

午後、彼は「山の頂上に登って、里の人々の心願の成就を神に祈願する」と称して、一人で岩山をよじのぼり、頂上に達した。

（いったい、これは夢なのか、現実なのか）

いまだに考える。

眠りについて、また目覚めても、見るのは「隠れ里」の人々の姿と、大風が吹けば飛ばされそうな小屋の様子。そして里を囲む、壁のようにそそり立つ険しい山。

夢ならば、いつかは覚めるはずだった。しかし一向に覚める様子が無い。



ただ、これが現実かといえは、どうしても思えない。

現代社会に「落人の里」「隠れ里」などがあるはずがない。自分が岩を割ったり、痛みを感じなかつたり、山の急斜面を登つても疲れない、などというのはおかしい。人に触れても相手の体温を感じないというのもおかしい。

とはいえ、夢ならどうして覚めないのか、現実に戻らないのか、などと疑問が残る。

では、タイムスリップしたのか。

(いや、鬼田だの、夜田などという一族は、聞いたこともない)

疑問だらけだった。

ただ、なんの娯楽もなさそうな里で、粗末な家で、なんの味もない料理ばかり出るが、自分が「神の子」「神の使い」として救世主扱いされてチャホヤされるのはイイ。だが、自分が神の子でないことは自分が一番よくわかっている。ずっと「神の子」として崇め奉られるなら、ここは「桃源境」といえるかもしれない。だが、実は神の子ではなかった、ということになつたら?

それを思うとおそろしくなる。「俺は神の子」などと言つただけに、今さらウソでしたとは言えない。

彼は山の頂上に立ち、里のほうを見おろした。

どの方向を向いても、険しい山と谷である。岩肌むき出しの山も多い。

(いったい、おれは)

明は空を仰いだ。

静かに雲が流れていた。

しばらくそのままでしたが、やがて彼は里のほうへ引き返した。

山の頂上と里との中間地点まで来た時、斜面の下のほうから人声が聞こえた。若い男女の声だった。

明の胸がひとりでに高鳴った。「ゆみ」と「さぶろう」に違いない。

「夜伽を命じられただと?」

鋭い声は男のものだった。

明は足をとめた。

近くに、大きな岩があり、人がひとり隠れる程の凹みがあつた。

「!」

人の話声が近づいてきた。明は岩の陰に隠れた。

二人の会話が聞こえた。

「そうじゃ。たしかに、命じられたが、なにか?」

「で、で?」

「朝までともにいたわ」

「なんだと!」

「さぶろうが、なにを怒っておる」

「なにが夜伽じゃ。なぐさみものになる為に身体を鍛えてき

たわけではあるまいに」

「たわけたことを。朝までふしど臥所をともししたが、それだけのこと」

「なに？」

「なにもなかったわ」

「さ、さ、さようなことがあるものか。ゆみの肌に触れて、何もとは」

「でも、あたたかかった」

「あたたかかっただと？」

「これまでに感じたことの無いあたたかさであった。あれこそ、神の子の証であろう」

「けつ。なーにが、神の子じゃ。あやしいぞ。まことに神の子であろうか。あやつは神の子ではなくて疫病神ではないのか」

「なにをいう！」

「あやしいぞ。なにやら奇妙なものを身につけていたというが、それが神の子であるという証にはなるまい」

「さぶろう、『御方様』の御前にて、光をみたであろう。岩が割れるのをみたであろう」

「ふん。岩を割る怪力というが、神の子でなくとも、魔物でも、鬼の子でも、岩を割ることはできようぞ。あやつは疫病神じゃ。いや、どこぞの国の間者かもしれぬ。とにかく、あやつがいては、なにか悪いことがおこるぞ」

「ばちあたりが！」

そのとき、ゆみの甲高い声が上がるとともに、ぱしつという乾いた音が鳴った。

そして何ものが山の下へ走り去って行く気配がした。明はその場を動かなかった。

#### (四)

それから四日が経った。

明は喜兵衛に連れられ、北の見張り小屋と北西の見張り小屋、西の見張り小屋に案内され、その様子を見、また隠れ里に戻ったばかりだった。

それぞれの小屋へ行くのに一日がかりだった。

明日には南西の見張り小屋へ行くとのこと。そのあとで南の見張り小屋へ行き、南東の見張り小屋へ行き、最後には東と北東に行くらしい。

そうして隠れ里の地理を明に実際に見聞してもらい、よく検討して里の守りを強固にする方策と、お家再興と勝池城奪回の策を練ってもらおうということらしい。

#### (どうしよう)

明は途方に暮れた。

夢は覚める気配が無い。時間ははてなく過ぎて行く。隠れ里の状況は分かった。どれだけ貧しい暮らしをしているかも、どれほど険しい山々の中で住んでいるかも。

ただ、お家再興、お城奪回といっても、どうすればいいのか

分らない。途方も無い話だ。

隠れ里で生まれ育った男十名女十名が各地に散らばり、かたきの夜田氏を倒す策を練り、実行に移そうとしているというが、よく分らないところがある。

里の人々の指導と鍛錬により特殊な能力を身につけたといっても、たった二十名でなにができるというのだろう。その二十名を自分が率いて敵を討つというのだろうか。

（しかし、そのうちのひとり『さぶろう』とやらにも信用されてはいないではないか）

夢から覚めるなら早く覚めてくれ、と明は思った。

彼はまた、神に祈ると称して里の近くの山の頂上へと登った。頂上へ着き、しばらく時間をつぶしていると、脳裏に浮かぶのは「おゆみ」の姿。

夢なら覚めてほしいが、あの女性とは別れたくないような。あの女性はおれのことを「あたたかい」と言った。そんな人が今までいたか。明はそう思い、添い寝した夜のことを思い出した。

（今夜は御方様の屋敷の近くのあの場所に泊まる事になっているが）

そう思うと彼の心の中に妄想がひろがる。

今度はただの添い寝ではなく、ああして、こうして……。

そんなことを考えているうちに、空がにわか曇った。

もう、夕暮れに近い時間ではあったが、暗くなるのが早すぎ

る。

胸がざわめいた。

あやしい雲行きになり、突風がおこった。

嫌な予感がして、引き返すことにした。

「あっ！」

彼は驚きの叫びをあげた。

里からどす黒い煙が幾つものぼっている。

異変に気づいた。

なにか、悲鳴のようなものが風に運ばれ、彼の耳にも届いた。

彼は斜面を駆け下りた。

「いったい、なにが」

里の家々が見えたとき、信じられない光景が目に入った。

黒装束、黒覆面の集団が駆け回り、火に包まれた家から飛び

出した里の老人たちを斬り伏せている。

突然のことだった。老人たちは武器らしい武器も持たず、黒

装束の集団に斬られ、苦悶の叫びをあげていた。

「喜兵衛さん！ おゆみさん！」

明は叫んだ。

「探せ、探せ！」

黒い集団の中心に居た者が叫んでいた。

御方様の屋敷は燃えていない。黒集団は「御方様」の屋敷に

も押し入っていた。

屋敷の入り口に別の小集落の者が現れ、黒集団にぶつかって

いった。太助という者だった。

「なにやつ！」

太助は長い丸太棒を持ち、槍のように突きを入れた。

黒装束の一人がそれをかわし、刀を振りかぶり、さつと間合  
いをつめて斬りつけた。

太助の腕が切斷された。

屋敷の中から、老いた女たちの悲鳴があがった。

明の頭に血が上った。

「キサマら！」

逆上し、我を忘れ、人の胴体ほどもある大きな石を持つと黒  
装束の集団へと投げつけた。

大石はその中の一人に命中し、当たった者は勢いよく後ろへ  
倒れた。

黒装束の集団が明の方へ向き直る。

黒覆面のため、顔は分からない。ただ、目つきが異常なのが  
分かった。

明は近くに立てかけてあった棒を振り回した。

むやみやたらと振り回していたら、棒が相手の頭に当たり、  
鈍い音が聞こえた。

黒い装束・黒覆面の集団は二手に分かれ、一組は明を囲み、  
もう一組は屋敷に押し入っている者たちと合流した。

「さがせ、もっとよくさがせ」

謎の者たちが叫んでいる。なにを探しているのかは分からな

い。

明は武術など知らない。ただひたすら棒を振り回していた。  
敵が斬りつけてきた。明の棒が相手の刀をはねとばした。

黒集団は明包围網を縮めた。

明は棒を大きく、勢いよく振り回す。

包围の輪がさつと拡大される。

明が棒を振るのをやめると、また包围網が縮小される。

振り回すとまたものかたちに戻る。きりがなかった。

そうしているうちに、

「ないぞ、どこにもないぞ！」

「やむをえぬ。ひけ。ものども！」

屋敷の中から声が聞こえた。

間もなく、屋敷に押し入った黒装束・黒覆面の者どもが表に

出、明包围網に加わった。

明は疲れなど感じない。

「ちくしょう、なんだってんだ！」

叫びながら、棒を振り回し続けた。

さすがに黒装束の集団もあきれたらしい。

包围の輪を縮めることをぜず、見守った。

すると、別の小集落の方面から別の黒集団が現れ、明に向か

つて弓を向けた。

無数の矢が飛んできた。

明は棒を振り回して矢を避けようとしつつ、後ろへさがった。

矢が数本、明の身体につきたった。痛みは感じなかった。刺さった矢を抜こうともせず、明は棒を振り回した。

(これじゃあ、ダメだ。ほんとうに、きりがない)

明は棒を投げ捨てた。

黒装束の集団はそれをみて半歩ばかり近寄った。

「キサマら、腰をぬかすなよ。おれは、神から力を授かったんだ。それは、この……」

荒い息とともに言うと、ペンライトをポケットから出し、この前と同様、袖口から光を出した。

「うっ!!」

「これは?」

黒装束どもはあとじさりし、その中の一人が「ひ、ひけい!」と叫ぶとともに数名ずつ姿を消していった。

やがて、一人もいなくなつた。

明は謎の集団が消えたことを確かめると、「御方様」の屋敷に入った。

「……」

なんとも凄惨な光景だった。

肩口から袈裟懸けに斬られて絶命しているものがある。胸を突かれて倒れ伏している者もある。目を見開き、そのまま息絶えている者もある。みな、里の老人だった。

屋敷の中はひどく荒らされていた。

謎の黒装束集団は「探せ」と叫んでいたが、なにを探してい

たのだろうか。

明は御方様の部屋に入った。

中をみて、息をのんだ。

絶句しつつ、跳躍するようにして御方様のもとへ寄った。

御方様も斬られ、倒れ伏していた。その前には、御方様をかばうようにして、さぶろうが倒れ、そのまた前には数名の黒装束が倒れていた。

「うっ、うっ」

さぶろうの声が聞こえた。まだ、息があるらしい。

「なにがあつたんだ!」

明は抱き起こし

さぶろうは目をあけた。

「やはり、神の子ではなく、疫病神だったな。このありさまだ」

「……」

「裏切り者だ。裏切り者がいたんだ」

さぶろうはそれだけ言うと、頭を垂れた。

「裏切り? 誰だ、それは!」

明は大きな声を出し、さぶろうの身体を揺さぶった。

返事はなかった。さぶろうの身体から一切の力がすでに抜け  
ていた。

「おゆみさんは?」

明は表に出た。雨が振りだしていた。

他の小屋をみた。死体だらけだった。喜兵衛の死体もあった。雨の中を駆け、別の小集落へ行つた。ここも死体だらけで、生存者はいない。

「いったい、どうして！ 見張り小屋もあつて、こんなに険しい山に囲まれていて……」

明は、洞窟をでて自分が最初に目覚めた時にいた小集落にも行つた。

やはりそこも死体ばかりだった。

おゆみの死体だけはなかった。

（裏切り者とは誰なんだ。あの黒装束の敵とは。例の夜田氏の者か？）

混乱する頭で明はさまざまなことを考えた。

おもいつきり泣きたい気分だが、涙は出なかった。

（これは夢なんだから、夢なんだから。夢なら早く覚めてくれよ！）  
心の中で叫んだ。

それでも夢は覚める気配が無い。

雨は降り続いた。

明は小屋にも入らず、雨にうたれつづけた。

もはや死体を直視できなかつた。

「神の子ではない」

「疫病神」

さぶろうの言葉が耳にこびりついていった。

（おれがあんな妄想をしている間に、村は）

明は握りこぶしを震わせた。

老人たちの死体をみたら、大きく見開いた目が「なぜ救つてくれなかつた！」と訴えそうに思えた。

明はやがて、歩き出した。生きるために。おゆみの行方を捜すために。黒装束の集団の正体を突きとめるために。さぶろうの言つた「裏切り者」の正体を確かめるために。

彼はその先で、謎を突きとめ、さらに、思いもかけぬ人物と出会うことになる。